

# 農機具・産業用エンジンメーカーの草分け

## 株式会社クボタ（大阪市浪速区）

トラクターなどの農機具のメーカーとして良く知られている「株式会社クボタ」。その機具を動かすエンジンもまた、製造している。代表者は木股昌俊（きまた・まさとし）社長。☎06-6648-2111。本社は〒556-8601大阪市浪速区敷津東一丁目2番47号。

また、クボタ全額出資子会社として、日本国内市場向け小型ディーゼルエンジン及びアフターサービス部品を販売している「株式会社クボタエンジンジャパン」。代表者は馬越匡（うまこし・ただし）社長。☎06-6648-3638。本社はクボタ大阪本社内にある。

両社を2回に分けて紹介する。

株式会社クボタは日本の産業を支えてきた会社の1つだともいえるだろう。そして現在は、アジア、北米などにも活動拠点を拡大している。

だが、創業当時は、鋳物業が中心だったという。

### 創業・沿革

株式会社クボタの創業は、明治23年（1890年）。創業者は久保田権四郎（くぼた・ごんしろう）氏。19歳の時に、大阪市内で鋳物業「大出鋳物」を開業した時にまでさかのぼる。

当時、日本はコレラなど、水の汚染によって媒介される伝染病が流行しており、水道の整備が急がれていた。多くの会社が、水道管の製造に失敗する中、権四郎氏は強い信念を持って研究に取り組み、明治26年（1893年）にようやく、水道用鋳物管の量産化に成功した。これにより、多くの人々に安心・安全な飲料水を提供する道を切り拓いたことになる。そして明治30年（1897年）には「久保田鉄工所」に改称した。

転機となったのは、昭和10年（1935年）。権四郎氏は、「将来、鋤や鋤のかわりを機械が担うようにな



クボタのエンジングローバルマーケティング部第二部・中畑部長（左）、クボタの鎌田執行役員（中央）、クボタエンジンジャパンの馬越社長（右）

る」と考え、農業の機械化の研究に着手した。この研究成果は、昭和22年（1947年）、日本では第二次世界大戦後の食糧増産が必要となった時期に、耕うん機の開発成功という形で実る。その後、高度経済成長による農村の労働力不足をカバーする機器として国内で急速に普及。その後、トラクター、コンバイン、田植え機など、次々と開発を行い、農業の機械化による省力化に貢献した。

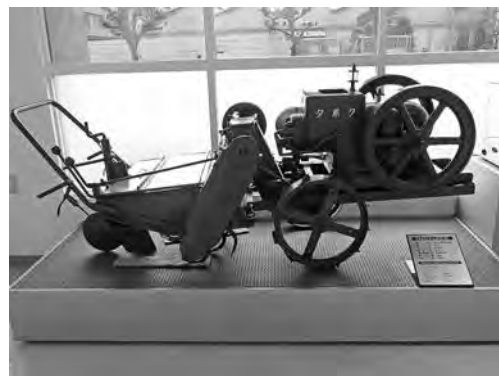
昭和28年（1953年）には、久保田鉄工株式会社社名を変更。昭和35年（1960年）には、日本で初めてとなる海外水道工事を受注・竣工。そして、昭和45年（1970年）には米国でトラクター市場に本格進出、その後の中国、アジア、ヨーロッパ各市場への進出の第一歩といえる。

平成2年（1990年）には創業100周年を迎え、この時に、現在の株式会社クボタに社名を変更した。

平成22年（2010年）には、環境省より、「エコ・ファースト企業」の認定を受ける。水事業、そして農業と



経済産業省の近代化産業遺産に認定された  
国産第1号水冷灯油エンジンA形



生産第1号耕うん機K-1形



創業者・久保田権四郎翁の像

ともに歩んできた会社だからこそ、何よりも地球環境を大事にするというクボタの活動が認められたといえるだろう。

## 事業の特色

クボタの事業は、大きな2つの柱があるといえる。1つは、農業生産を支援する機具などを提供する機械部門。そしてもう1つは水インフラを支える水・環境部門だ。



家庭菜園用の耕うん機

クボタの代名詞ともいえるのが、トラクターだ。決して平地だけとは限らない、日本の農地に対応した、さまざまなタイプのトラクターを開発してきた経験が、大規模農業を展開している北米市場に対応した大型トラクターから、アジアの小規模農家で使われる小型トラクターまで、多様な性能を持った製品の供給につながっている。

クボタのトラクターの魅力は、力強さと低燃費にあるといっていだろう。

そして、なによりこのことを実現しているのが、クボタが開発・生産している「新世代のクリーンなディーゼルエンジン」及び「ガソリンエンジン」だということになる。

ディーゼルエンジンにおいては、低燃費だけでなく、低振動、低騒音、NOxの低減などもまた、特色となっている。

エンジンが搭載されているのは、トラクターだけではなく。工事現場で使われるミニホッパーやホイールローダーなどにもクボタのエンジンが使われている。いわば、農業や建設の現場における、重要な動力源となっているということだ。

一方、水・環境分野でも、鉄管・合成管・鋼管など、創業時から続いてきた資材をはじめ、上下水道や雨水排水などに使われるポンプや浄化槽、そして



クボタトラクター「レクシア (REXIA)」シリーズの型式「MR60 (60馬力)」

下水浄化に使われる「液中膜ユニット」なども供給している。

近年は、農産品加工など室内での作業を快適なものにする、空調設備の生産なども行っている。

## 今後の注力分野

現在、クボタが力を入れている事業分野の1つが、海外事業だ。例えば、インドだけでも、日本の10倍のトラクターの需要があるという。しかも、人口増などに伴って、より効率的な食糧生産が必要ともなっている。こうした市場にむけて、さまざまな機器を提供していくことが期待されている。

さらに、国内の農業の活性化に向けては、「情報コミュニケーション技術 (ICT)」の活用が進められている。ICTは現代においては必須のものとなっているが、クボタも例外ではないということだ。農業機械とICTを融合させて農業経営を見える化する、「クボタスマートアグリシステム (KSAS)」を開発し、日本の大規模農家の効率的な圃場管理やコスト管理など、生産性の高い農業の実現を支援するシステムとなっている。

もちろん、機器の方も、KSASに対応した製品が発売されており、農機の移動情報やメンテナンス情報なども管理できるようになっている。

さらに、近年は農業において、品質管理やトレーサビリティが重要視されるようになってきている。お米など農業生産物の食味にはタンパク質含有率や水分含有率などが影響するが、これを検知する食味収穫センサーなども開発され、農業の「見える化」が進められている。

本業でも、企業の社会的責任 (CSR) においても、地球環境保全はクボタにとって最重要課題である。水・環境部門での貢献をはじめ、事業所そのものの低炭素化はもちろん、ディーゼルエンジンのさらなる高効率化による二酸化炭素排出削減にも大きな価値がある。

とりわけクボタが得意とする「小型ディーゼルエンジン」は、世界各国の排出ガス規制をクリアする上に、化石燃料の消費を抑制していくものだ。さらに、エコプロダクツ制度という社内制度を通じて、環境保全活動を推進させている。